

The Cambridge Gazette: Lessons Learned

For Young Samurais in the Age of Globalization and the Internet

『ケンブリッジ・ガゼット: Lessons Learned』
第5号 (2006年10月)

ハーバード大学
ケネディ・スクール
シニア・フェロー 栗原 潤

グローバル時代における知的武者修行を目指す若人に贈る栗原航海(後悔)日誌@Harvard

今月号の目次

1. 新学期が開始したハーバードより
2. 栗原後悔日誌@Harvard
3. 教養という人生のお化粧も忘れずに
「ヒトの和」を生み出す教養
一市民として必須の教養
教養: 人生のお化粧として
4. 編集後記

1. 新学期が開始したハーバードより

9月も中旬になれば、授業と研究活動も一段と本格化します。そうした爽やかさと緊張感が漂うハーバードから「グローバル時代における知的武者修行」を目指す若い方々を対象としたメッセージ第5号をお届けします。

2. 栗原後悔日誌@Harvard

4ヵ月程前、本校の関西経済同友会フェローで関西電力の垣口裕則氏から素敵なプレゼントを頂きました。同氏は伝統的な造り酒屋が在る京都伏見のご出身で、私に5月に開かれた全国新酒鑑評会で金賞を受賞した貴重な日本酒を下さいました。歓喜した私は早速自宅でそのお酒の色香と味を堪能しました。が、そこでハタと気が付きました—「何か足りない!」と。確かに美酒には、美味しいお料理、美しい器、ムードある照明、そして何にもまして素晴らしい飲み友達が必要です。気楽な身分の単身赴任をし、外食を中心としている私にはこの美しいお酒以外は何も手元に無いことを、この美酒が美酒たるが故に私に気が付かせてくれたのです。2杯目を飲む時に、

行き着けのお寿司屋さんに行こうと思いましたが、栓の開いたお酒を持参するのも面倒だし、自慢するみたいで変でもあるし、また板さん達にもお酒を分けると…とワガママな邪心も浮かんで来て、結局、李白に倣い、月と私と私の影とでそのお酒を楽しみました。こうして美酒を楽しむには、料理、器、相手等のバランスが大切だと痛感した次第です。

随分昔の話ですが、作家の村上龍氏が司会する『Ryu's Bar』というテレビ対談番組がありました。或る夜、番組のゲストとして世界銀行の多数国間投資保証機関(MIGA)初代長官に就任された寺澤芳男氏が出演されました。随分昔なので正確な言葉は忘れましたが、寺澤氏は「ニューヨークやワシントン DCのエリート達は美術や音楽等、芸術の世界でも一流の知識を持っており、そうした教養を持たないとまともな相手として扱ってくれない」旨のお話をされました。それから暫くして私のワシントン DC 出張中、或る日米欧三極会議が開催され、初めて寺澤氏とお目にかかる機会が巡って来ました。同氏はお忘れになられたと思いますが、会議の休憩時間時、私は寺澤氏に親しげに近づき唐突にも「『Ryu's Bar』を拝聴しました。素晴らしいことを仰ってましたね」と興奮気味で話しかけてしまいました。同氏の微笑みつつも驚いた顔を思い出すと今でも自らの粗忽な行動を恥かしく思います。さて、小誌創刊号で「知的武者修行」では、(1)一流の専門知識、(2)幅広い一般教養、(3)語学力、(4)マナーと交際術、(5)多角的・重層的な協力・相互補助の精神が重要であると申し上げました。そして、確かに寺澤氏が語る如く、(1)は当然のこととして、それとバランス良く、(2)も同様に大切だと思います。

3. 教養という人生のお化粧品も忘れずに

こうして今回のテーマは「教養という人生のお化粧品も忘れずに」です。結論を先取りして申し上げますと次の通りです。国際的な知的対話では、それに値する一流の「ふさわしさ」ないしバランスが重要である。たとえ専門知識で優れていても、教養も、礼儀も、そして協調の精神もなければ相手にされない。仮に瞬間的に相手にしてもらったと思っても、相手の方が何度も会いたいと思われることはない。この意味で小誌8月号の「ヒトの和と輪」を生み出すには、「教養」は不可欠である。「教養」はビジネスや研究で有益であるだけではない。グローバル化が進展するなか、我々は複雑な国際関係に包まれている。正確な国際情勢把握と的確な国益認識を行い、その上で日本の意思決定を行う政治家を選出するには、一国民である我々も「良識」を持たねばならない。そして、その「良識」は、幅広い「教養」によって根気よく育てゆくしかない。が、そう言っても本当は「教養」は上記のように堅苦しく考える必要はない。如何なる時も、すなわち、幸いなる時も禍ある時も、自らをまた友人に対して、希望と喜びという艶やかさを人生に与えてくれるのが「教養」である。換言すると、派手さは無いかも知れないが、「教養」は薄い「人生のお化粧品」のようなものである。これが今回の話であります。

「ヒトの和」を生み出す教養

寺澤氏のような超一流の経験はありませんが、私自身もビジネスの上で「教養」に救われた経験を持っています。これに関して、私が駆け出しの社会人であった頃の海外調査での経験をご紹介します。或る時、英独仏欧州3国及び米国における或る統計の収集と、専門家との面談という仕事を指示されました。小誌7月号でも触れた通り、大雑把な話ですが米国人は欧州人に比べて「アッケラカン」としている国民性から、若輩者の私でも単独調査可能との上司の判断でした。しかし、欧

州人は性格が多少異なり、彼等独自の矜持というものがあって、エリートは或る種の「近寄り難さ」を持っています。このため欧州へは年配の上司と2人で行くことになりました。こうしてパリの予算省や国立統計経済研究所(INSEE)、ロンドンの中央統計局(CSO)、ヴィースバーデンの独連邦統計庁、そしてワシントンDCの国勢調査局等を訪れた3週間程の西廻りの世界一周出張を経験致しました。

出張中、パリでプライドのとても高そうな高級官僚と面談後、その方を私共が夕食に招待することになりました。私は喜び勇んでガイド・ブック『ミシュラン』の三ツ星レストランを予約しようとしたところ、「フランス高級官僚にフランス料理でもてなすのは分が悪い」との上司の言葉から、渋々中華料理店に予約を入れました。そして難しい顔をしたフランス人と3人、沈黙の中で会食は始まりました。その時、上司が注文した羊料理が出てきたので「羊といえば、『お願いします、子羊の絵をかいて! (S'il vous plaît, dessine-moi un mouton!)』を思い出しますね」と話しました。ご存知の通り、これは『星の王子様(Le Petit Prince)』の中の王子様の最初の言葉です。するとそれまで仏頂面をしていたフランス人が、「栗原さん、どうしてそれを知っているのですか?」と驚いた声で聞きつつ、顔をほころばせています。そこで私は「お国から見れば日本は遠く離れた国かも知れませんが、多くの日本人がシャネルやルイ・ヴィトンだけでなく、サンテグジュペリやヴォルテールを愛しています」と答えました。更には「フリードリッヒ大王がヴォルテールをサン＝スーシ宮殿での食事に招く時の『なぞなぞ』で書かれた招待状はお洒落ですね」と申し上げたところ、そのフランス人はテーブル越しに私の手を握りしめ、「フランスのことをそれだけ知っているとは驚きました」と仰りました。その後、私はこの方から「君の目だけだよ」というメモが着いた膨大な資料を頂きました。また上司からはホテルに戻った時に「クリちゃん、良くやった」というお言葉と共に美味

しいフランス・ワインを頂戴しました。

欧州から米国に渡り、所得階層別・人種別の家計調査に関して国勢調査局を訪れた時、8人の米国人が「変な日本人」である私に、次々と詳細な説明をしてくれました。彼等は、白人よりも黒人における所得格差の拡大が深刻だと私に語ってくれましたが、問題の性格故に重苦しい空気に包まれていました。ところが、私が「素人である私でも、それは分かるような気がします。ワシントン DC の街角で見かける浮浪者とマイルス・デイヴィスの人生を比較すると何となく分かるような…」と言った途端、彼等の瞳が好奇心で輝き出しました。米国経済担当の彼等は日本をほとんど知らないらしく、挙句の果てには「日本人もアメリカの音楽を聞くのか?」とこちらが驚くような質問まで飛び出しましたが、幸いにも大量の資料を頂いた経験があります。

当時はインターネットもなく、また情報公開制度も充実しておりませんでした。従って細かい統計資料や狭い分野の調査分析となると、目的とする資料を一体誰が持っているかを時間をかけて調べ、そしてわざわざ海外出張をしなくてはならない時代でした。そうした苦労も有りましたが、浅薄な「教養」でもそれなりに私を救ってくれました。勿論、私自身、「教養」が救ってくれた体験だけをしてきたのではありません。逆に私自身の「教養」の浅薄さを嫌というほど感じたことも数限りなくあります。小誌前号で書きました通り、「最近隣国」の朝鮮に関する歴史は恥かしながらほとんど知りませんでした。以前、スロヴェニアの優秀な研究者を、マサチューセッツ工科大学(MIT)ビジネス・スクール(スローン・スクール)の或る教授からご紹介を頂きました。しかし、その時私にとってスロヴェニアは、地理的にも遠く、知的にも未経験な国でした。このために真剣に日本の状況を聞くその研究者に対して、私の方からは具体的に伺うことが思いつかず、従って随分失礼なことをしたのではと反省した次第です。

このように、幅広い「教養」はそう簡単に出来ないことがご理解頂けると思います。ただ、幸いにも幅広い「教養」には、画一的な「模範解答」もありません。従って、若人の皆様は私の例を余り気にされることなく、ご自身のペースで、また好みの分野を中心にして「教養」を気長に構えて身に付けて下さい。さて、「9/11」直前の2001年8月、未だ世界全体がテロの恐怖を意識しておらず、のどかだった時代、家族旅行でロンドンとパリを訪れました。ビック・ベンの斜向かいに在るマリOTT・カウンティー・ホールに泊まり、翌朝、家族でテムズ河畔を散歩して、ロンドン塔の近くに在り、10年以上も前に出張で泊まったホテル、シスル・タワーの側まで来ました。そしてホテルの側で当時或る英国政府機関を訪れた時の忘れ難い出来事を思い出していました。英国高級官僚との面談終了後、別れ際にその方が、「栗原さん、これからどうされるのですか」と聞きました。「折角ロンドンに来ましたので、(書店の)フォイルズに立ち寄り、尊敬する(英国の大政治家)ディズレイリの『シビル、または二つの国民(Sybil, or the Two Nations)』でも買って読もうと思います」と申し上げたところ、彼の顔色がサッと変わりました。そして、「栗原さん、チョッと待って」と言い、長い廊下を通して再びオフィスに戻り、「これは表に出しては困りますが、あなたが資料をまとめる際に充分確信をもって書けるためには参考になるものです」と仰って資料を下さいました。この誇り高き英国高級官僚の方は、最初、東洋から来た私を単に調べものに来た「人類」とビジネスライクに思っていたのでしょう。が、私がディズレイリの話をした途端、教養ある彼等と同じ種類の「人間」として見做してくれたのだと思います。嬉しくなってホテルに戻り、膨大な資料を帰国前に別送したいとコンシェルジュに頼みました。しかし、忘れられていたせいか、翌朝のチェックアウト時にその料金が表示していないので、微笑みつつも冷やかに抗議した事を、2001年の夏、テムズ河畔で懐かしく思い出しておりました。

皆様、「教養」は物知りになって自慢するというのが目的ではありません。私の経験が示す通り、価値観を共有する仲間同士だと互いに確認する際、すなわち、「ヒトの和」を形成する際、「教養」が、時間と労力を節約してくれるのです。従って、グローバルな形で「ヒトの和と輪」を形成する時、「教養」は必ず皆様を助けて下さることでしょう。それに、今ではその気にさえなれば、インターネットでフリードリッヒ大王の「なぞなぞ」も『シビル』も簡単に知ることが出来ます。有能で若い皆様方のご努力に期待しております。

一市民として必須の教養

以上、ビジネスや研究で、「教養」が極めて効果的であることを皆様にお伝えしました。次に、「教養」は一市民として必須であることを申し上げたいと思います。小誌でお伝えしているようにハーバード大学は一流の研究者に新たな見識や視点を尋ね、また意見交流をするために政治家、ビジネスマン、官僚、社会活動家等の一流の実践家が世界中から集まります。例えば、8月20日から9月1日まで、15カ国、64人の様々な分野のリーダーが集い、グラム・アリソン教授やディヴィッド・ガーゲン教授等が企画した安全保障関連の会合 (Senior Executives in National and International Security) が開催されました。また8月29日から4週間、*The Cambridge Gazette* で何度もご紹介している中国高級官僚研修プログラム (中国公共管理高級培训班) (今回 57人) もありました。そして現在3人の中国の現職副大臣がフェローとして参加され、中国の物流問題、知的財産権問題、そしてリーダーシップ論に関しハーバードで数ヶ月研修を受けられます。また小誌でも時折ご紹介しているように日本のリーダーも多数来られています。関西経済同友会の方々は、毎年1度、本学研究者と活発な意見交換をされています。そして9月7日、今秋から私が客員教授となった関西学院大学からは、本校卒業生の村田俊一教授が優秀な学生さん達を連れて本学を訪れました。

こうして、各界のリーダーが本学を頻繁に訪れますが、元関西同友会フェローで大阪ガスの山川大介氏とガーゲン教授のリーダーシップ論について7月の一時帰国の際に思い出話をしました。すなわち、リーダーは、①能力、②積極性、③フォロワーとの連携とフォロアーの組織化等で分類・評価できる。そして、(a)有能で積極的な「ヒト」、(b)自分自身は有能ではなくとも優秀な部下を多く抱え、彼等の意見を上手に聞きながら積極的に動く「ヒト」が優秀と評価され、逆に、(c)本人が自らの無能さに気付かない上にフォロアーの意見も聞かない自惚れたリーダーが最も無能であるという話でした。確かに、「活動的な無知ほど恐ろしいものは無い (Es ist nichts schrecklicher als eine tätige Unwissenheit.)」と、ゲーテも示唆的な言葉を残しています。

極めて稀ですが、善悪や好き嫌いを別として本学に集まるリーダーで「問題だ!」と私が思う方がいらっしゃいます。その方々の特徴は、①ピントが完全に外れた質疑応答をする、②話が長く考えが整理出来ていない、③協調の精神に欠ける、以上3点です。これに関し、冒頭でご紹介した垣口氏と共に参加した或る会合で私は大失敗をしました。或る財界のリーダーが、*The Economist* や *Foreign Affairs* 等、世界の指導者層が目を通す所謂高級誌を読んだ経験も明らかに無く、一般情報だけに基づき、しかも国際関係の基礎を全く予習もせず本学教授に対して半ば喧嘩腰で、その上長々と話しておりました。私はその話の余りの酷さに大人気なく怖い顔をしてその方を睨みつけていました。こうして私よりも若いのに常に冷静さを失わない垣口氏の傍らで大人気無い表情と態度を見せてしまったことが恥かしく感じた次第です。その2、3日後、私は同氏に向かって言いました。「あの時、あの酷い話をどう捉えて良いか分からず、恥かしい程無愛想な態度になりました。申し訳ありません。が、時間をかけたため、考えが漸く整理出来ました。あの失礼な言動をした方は経理畑か技術畑かは知りませんが優秀な人に違い

ありません。だからこそあの地位まで上り詰めたのでしょう。しかしあの方は国際関係に関する知識、従って論拠が薄弱で、判断が感情的です。確かに彼は或る狭い領域において一流の専門家かも知れませんが、国際情勢を判断する能力は有りません。換言すればお金の勘定をする意味で一流の経営者だが一市民の資質としては疑問が残る。彼こそ正しくエコノミック・アニマルであり、民主主義下ではこういう人にも参政権が与えられている以上、国際情勢に暗く的確に国益把握が出来ない政治家が選ばれる危険が存在します」と。

小誌で繰り返し申し上げているように確かに国際関係は複雑です。だからと言って、極端に単純化され、偏狭なナショナリズム一辺倒で感情的に煽った主張に傾くことは極めて危険です。*The Gazette* の4月号で、ジョセフ・ナイ教授が「ソフト・パワー」に関して外交専門誌『フォーリン・ポリシー』に質疑応答の形で解説した記事を要約しました。その中にヒトラーや毛沢東が信奉者に対して絶大なる「ソフト・パワー」を有していたことを同教授は述べておられます。英国の大学者 E.H.・カー等が的確に指摘したように、ヒトラーは確かに大衆に対する心理的誘導に卓越した才能を発揮しました。*The Gazette* 昨年7月号でも触れた『わが闘争(*Mein Kampf*)』の中で、ヒトラーは対象とする相手を、理解能力の高い少数のインテリではなく、感情に左右される大多数の大衆とし、大衆に対する心理的誘導手段として宣伝の有効性を明確に述べています。すなわち、ヒトラーは「インテリ…にとって必要なのは宣伝ではなく学術的示唆である(Für die Intelligenz ... ist nicht Propaganda da, sondern wissenschaftliche Belehrung.)」と正確な認識を持ち、彼自身の目的は「少数の学者や耽美主義の若人の変な満足感ではない(nicht die gelungene Befriedigung einiger Gelehrter oder ästhetischer Jünglinge)」と説き、「(大衆操作手段の)宣伝の術は正しく大衆心理の理解に在る(Gerade darin liegt die Kunst der Propaganda, daß sie, die

gefühlsmäßige Vorstellungswelt der großen Masse begreifend.)」と喝破しています。

そして、ヒトラーは大衆の資質を見抜き、「大衆は精神的受容能力が極めて限られ、理解能力も低く、忘れることも甚だしい。その結果、有効な宣伝は極めて少数のポイントに絞り込む必要があり、宣伝用のスローガンは大衆の最後の一人が理解するまで繰り返すべきである(Die Aufnahmefähigkeit der großen Masse ist nur sehr beschränkt, das Verständnis klein, dafür jedoch die Vergesslichkeit groß. Aus diesen Tatsachen heraus hat sich jede wirkungsvolle Propaganda auf nur sehr wenige Punkte zu beschränken und diese schlagwortartig solange zu verwerthen, bis auch bestimmt der Letzte unter einem solchen Worte das Gewollte sich vorzustellen vermag.)」と述べ、宣伝の知的レベルに関しても、「宣伝は全て大衆向けであるべきで、その知的水準は宣伝が向けられる人々の最低水準に調整すべきである。従って大衆の数が大きくなればなるほど、知的水準は下方修正しなくてはならない。… 全大衆に対して影響を与える目的なら、高度な知的水準という前提は回避すべきで、そのための注意はし過ぎることはない。(Jede Propaganda hat volkstümlich zu sein und ihr geistiges Niveau einzustellen nach der Aufnahmefähigkeit des Beschränktesten unter denen, an die sie sich zu richten gedenkt. Damit wird ihre rein geistige Höhe um so tiefer zu stellen sein, je größer die zu erfassende Masse der Menschen sein soll. Handelt es sich aber ... ein ganzes Volk in ihren Wirkungsbereich zu ziehen, so kann die Vorsicht bei der Vermeidung zu hoher geistiger Voraussetzungen gar nicht groß genug sein.)」とこれまた驚く程的確です。従ってヒトラーの主張は大衆の感情に訴えるように極端に単純な形を採り、「宣伝を学術的情報のように多面的に検討がなされたものにするのは誤りだ(Es ist falsch, der Propaganda die Vielseitigkeit etwa des wissenschaftlichen Unterrichts geben zu wollen.)」と述べています。

皆様、ヒットラーの分析は恐ろしい程見事ではありませんか。「もし彼が生き延びていたなら、本校は彼を大衆心理誘導の天才として招聘しただろう」と或る本校教授が私に冗談混じりに言ったのを身震いしながら思い出しています。かくして70年程前、良心的ドイツ人は、①強制収容所、②迫害、③亡命、それとも④賛否・善悪を別とした服従、いずれかの道を余儀無くされました。歴史家のフリードリッヒ・マイネッケが戦後に著した『ドイツの悲劇(Die deutsche Katastrophe)』を読みますと、愚かな大衆心理に振り回された偉大なドイツの運命が本当に悲しく思えてきます。この意味で、有能で若い皆様が単純な議論で感情的に左右されるのではなく、複雑な議論を冷徹に追及する能力を持ち、しかも心理的にも逞しくて尚且つ国際的視野を持った「ヒト」になられることを願ってやみません。

チョッと話が飛びますが、カズオ・イシグロの小説を基にした『日の名残り(The Remains of the Day)』は、大戦間期、親ナチ派の或る英国伯爵に仕える執事役を名優アンソニー・ホプキンスが演じた魅力的な映画です。映画の中で、当時の政治経済問題に関して執事が如何なる見識を有するか試される場面があります。また確かに真面目で有能な執事を雇っていましたが、主人たる伯爵は複雑な国際政治の中で判断を誤り、失意のうちに亡くなります。判断力の無い指導者とその指導者に盲目的に服従し、ひたすら尽くす有能な執事…。描写と演技が見事なだけに様々な意味で考えさせられた秀作でした。この執事のように単なる「善良な人」であるだけでは民主主義下の一市民として、その権利を有効に行使することが出来ません。ヒットラーのような政治家に騙されないためには、一市民としての「良識」が必須です。そしてその「良識」は、幅広い「教養」が長い時間をかけて熟成させてゆくものだとは私は考えています。この理由から、市民として「教養」は必須となる訳です。

現在、国際情勢は大戦間期同様、益々複雑

化する様相を示しています。再び脱線で恐縮ですが国際関係に暗いエコノミック・アニマルと言えば、「日本人へ: 乱世を生きのびるには…」と題した小論を、『文藝春秋』誌4月号に載せられた作家の塩野七生女史のご意見に思わず微笑んでしまいました。すなわち、「激動する世界情勢下では主導権をにぎるしか勝つ道はないが、安保理の常任理事国でもなく核ももたず、軍事力を満足な状態では海外に送れない日本が、大国と思いついでいたこと自体が妄想であったのだ」とし、「こうなっては腰を落ちつけて、日本人だけで解決できる問題にわれわれのエネルギーを集中してはどうだろうか。… 主導権欲しさに悪あがきしても効果なしとは、安保理常任理事国入りの一件でわかった。援助外交も効果なしということも、三十年にわたる経験でわかった。… 今度こそ、堂々とエコノミックアニマルをやるのである」と提案されています。『チェーザレ・ボルジアあるいは優雅なる冷酷』をはじめとして同女史の小説は誰をも魅了しますが、この提案には一瞬私も驚きました。しかし、最後の言葉「そして何よりも重要なのは、持てる資源を徹底して活用する冷徹な精神である。日本の資源と言えば、人材であることは言うまでもない。体力にさえ自身がつけば、何に対しても人間は、自信をもって対処できるようになってくるものですよ」を読んで納得しました。皮肉を絡めた軽妙なタッチの同女史の主張は「経済力だけを頼みに幻想である大国意識を独善的に抱いては、世界で通用しない。自らの能力を冷徹に分析し、高い『志』と能力の持ち主である『ヒト』の心技体を鍛えよ」だと私は理解しております。

教養: 人生のお化粧として

私はこれまで「教養」の大切さを、①ビジネスや研究の上で「ヒトの和」を作るのに有効という理由で、また②的確な国際情勢判断と明確な国益認識を持つ政治家を選出するため必須であるという理由で強調してきました。しかし、本当はそのように堅苦しく考えると

今回のテーマは詰まらなくなるでしょう。『古今和歌集』に、「花に鳴く鶯、水に住む蛙の声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌を詠まざりける」という言葉があります。すなわち、①や②で私が理屈っぽく語ったことにかかわらず、私達は美術や音楽を自然にまた気楽に楽しむ「生き物」ではないか、という点を最後に申し上げたいと思います。

私は中国の『三国志演義』や『唐詩選』が大好きで、ケンブリッジに研修中・留学中の中国、香港、台湾、それに中華系シンガポールの方々や諸葛孔明や李白の話をするのが理屈抜きに楽しくてしかたがありません。The Gazette 昨年5月号にも書きましたが、陽明学者山田方谷の人生を伊吹邦彦氏が著した『炎の陽明学——山田方谷伝』を私の机の上で発見した中国出身の友人が、「ジュン、この本は何?」と聞きました。そこから陽明学を通じた日中友好談義が始まり、彼から中国貴州省等、王陽明に縁の深い土地に関する情報を沢山教えて頂き、私自身大いに満足した経験があります。また彼等に日本における有名な小説家である夏目漱石のペンネームが『世説新語』に由来していることを話すと、知らない人が多いのには私自身驚かされ、日本文化の情報発信量が未だ少ないと感じた次第です。こうして今、有能で若い皆様グローバルな「ヒトの和と輪」を形成して、私以上にのびのびと肩肘はらずに世界の色々な方々と共に文学や音楽を楽しんで頂きたいと望んでいます。

大日本帝国海軍が誇る知将の一人、高木惣吉少将は著書『太平洋戦争と陸海軍の抗争』の中で日本の将官に対するマッカーサー元帥の印象に触れています。同元帥は青年将校時代の印象—日露戦争時の將軍である大山巖元帥、黒木為楨大将、東郷平八郎元帥等に出会った印象—と、太平洋戦争時の将官に対する印象と全く違っていると吉田茂首相に語ったそうです。高木少将は太平洋戦争時も日露戦争時と同様、或いはそれ以上の知性と勇気を備えた将官がいたことを述べると共に、この占

領軍総司令官の疑問に対して理由を2つ挙げています。その第一は優れた将官の多くが太平洋戦争中、無理な戦いで戦死するか自決してしまったことです。第二の理由は日清戦争以後にみられた全般的な軍規・士気の漸次的低下です。これに関して高木少将は次のように語っています。「物知りという点では昭和の軍人の方が昔の軍人より上になったが、一番問題なのは近年の軍人が、まず善良なる日本人であることよりも、強い軍人、向こう気の強い軍人を育てることに傾きすぎたということである。そのために視野の狭い、専門の職人的戦争屋になったのが大きな違いで、月を見ても、花を見ても、人生の悲しみも笑いもなくしたような人が多くなったように思われる。まして白昼公然と制服で上官を斬殺して平然たるような軍隊が、どうして厳しい対外戦ができると考えられようか」、と。皆様、文武両道を貴んだサムライ魂を忘れ、花鳥風月に不感症の無粋な「職人的戦争屋」とは、マックス・ヴェーバーによる『プロテスタントの倫理と資本主義の精神(Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus)』の中の「精神のない専門人(Fachmenschen ohne Geist)」という「末期的人間(letzte Menschen)」と正しく同じ類の「輩」ではありませんか!!

余談ですが、高木少将は東郷元帥が日露戦争直前の連合艦隊司令長官に就任される際の興味深い話を紹介されております。巷間、東郷中将(当時)の抜擢には明治天皇も不思議に思われ、山本権兵衛海相が「東郷は運のいい男ですから」と奏上したと言われており、私もそう理解しておりました。ところが、高木少将は次のように語っています。すなわち、山本海相の心を悩ませた一つが主将の選定でした。当時、鎮守府や各艦隊の多くの長官達は、口々に桂内閣の弱腰外交を罵倒していたそうです。そこで、山本海相が彼等に対露作戦に関する意見書を提出させると、回答のほとんどが楽観的開戦論で中央の軟弱外交を非難した提督さえあったそうです。ところが唯一通、異色の意見書があり、それは彼我の兵

力、極東・欧露の地政学、基地間の兵站等を詳しく比較検討した上での日本勝利の確率的計算でした。この意見書の主が、当時、舞鶴で予備役直前の東郷中将にほかならなかったそうです。こうして、確かに東郷元帥は「運」も強かったのですが、「知」についても優れていたことがご理解頂けたと思います。それが故に日本海海戦時、出色の名参謀秋山真之中将と見事な連携プレーが出来たのかも知れません。また高木少将によれば東郷中将が緒戦時の旅順閉塞に際して、全艦隊を率いての決死隊收容計画が追加されるまで、有馬良橘参謀がいくら進言しても聞き入れなかったそうです。そして、「こんどの戦い(太平洋戦争)で苦しまぎれとはいえ、特攻攻撃を中央大本営の計画に組み入れて、あまり良心の痛みを感じなかったらしい首脳と何たる相違であろう」と高木少将は記しています。こう考えると、日露戦争時の将官は「勇氣」は言うまでもなく、「運」と「知」、更には「情け」をバランス良く兼ね備えていたと言えましょう。

勿論、現在の中東情勢等を見ても分かる通り、戦争とは元来人命を奪う悲惨なもので、今尚世界の各地で散発しているのは悲しいことです。こうした辛い世の中ですが、私は幸運にも日米を中心とする立派な軍人の方々と親しくさせて頂き、彼等の「知」と「情け」に触れる機会に恵まれております。職業柄、いざという時には自らの生命の危険があることを覚悟しているからこそ、彼等は冷静で戦略的思考をなさいます。ゲーテも、「社交界同様、人生において最も有利な立場にあるのは教養ある軍人である(Die größten Vorteile im Leben überhaupt wie in der Gesellschaft hat ein gebildeter Soldat.)」と語り、教養ある軍人となら、「優しさを強さの影に隠しているのです、いざという際には協調することが可能(weil doch meist hinter der Stärke eine Gutmütigkeit verborgen liegt, so ist im Notfall auch mit ihnen auszukommen.)」と語っております。

翻って私達一般人はどうでしょう。ゲーテ

は「最も厄介なのは無骨な一般人だ。粗野なことに何ら関係する必要もないのだから、本来なら洗練されてしかるべきである(Niemand ist lästiger als ein täppischer Mensch vom Zivilstande. Von ihm könnte man die Feinheit fordern, da er sich mit nichts Rohem zu beschäftigen hat.)」と語っています。すなわち、「戦争の悲惨さも知らず、命を懸けて危険にも曝されぬ安穩とした一般人が知性・品性を洗練しないとは何事だ!」とゲーテは我々に奮起を促していると私は理解しております。

軍人と一般人との結びつきで私が印象深く思っているのは、真珠湾攻撃直前までの、帝国海軍と大哲学者西田幾多郎博士等の京都学派との繋がりです。その関係で、知将高木惣吉は鎌倉姥ヶ谷の西田邸に伺った思い出を書かれています。すなわち、「西田先生の質問ほど特色のあるものは珍しかった。軍事問題、外交問題の核心にふれてくるその質問ぶりは、素人だからといってごまかせない真剣さがあり、むしろ凄みにちかいものがあって、体のひきしまる思いをさせられるのが毎度の例であった。部内の先輩では山梨大将がかつて次官時代、よく急所を質問されて恐ろしかったものだが、先生のような根本的な、しかも熱心な部外の質問者にあつたことがない」、と。哲学者の三木清も西田博士の世事に対する洞察力を称えています。が、「正真正銘」の哲学者は、何事にも本質を見極める眼識が具わっているのだと改めて感じた次第です。因みに、山梨大将とは、若槻禮次郎首相の自伝『古風庵回顧録』にも出てくる極めて優秀な軍人の一人、山梨勝之進大将で、1930年のロンドン海軍軍縮会議の際、堀悌吉中将等と共に当時の国際情勢と日米の国力比較を冷静に勘案出来る数少ない人材でした。残念なことに、当時の帝国海軍は情緒的な強硬派が主流となり、組織として理知的な判断力が脆弱化し、山梨、堀といった帝国海軍の「頭脳」はその意思決定機構の外部へと姿を消してゆきます。これに関して高木少将は、「科学的、合理的とみずからも許し、世間にもうわさされた海軍も晩

年はいつのまにか、精神主義にもどっていたのであろう」と書かれています。

有能で若い皆様、軍人も一般人も、音楽や美術を愛する心を失い、無粋・無骨なまま短い人生を過ごすには余りにも「もったいない」と私は思います。確かに「教養」は、はしたなく見せびらかすものでもありませんし、また眩しく光り輝くものでもありません。その意味では、控え目な一つの「資質」であります。しかし、私の経験でもお分かりの通り、それなりに実用的で、また楽しさと喜びも与えてくれるものであることには間違いありません。私は、「教養」は薄い「人生のお化粧」だと考えております。或いは「人生の隠し味」と言えるかも知れません。音楽の短い一節や文学の短い言葉が、どれだけ私達、そして友人達を喜ばせ、心を一つにさせてくれるか。悲しい時や疲れた時、シェイクスピアの文学やショパンの音楽は私達の人生に希望という艶やかさを取り戻してくれます。私はこれまでの経験でその有り難さを充分感じてきました。この意味で、若い皆様のご自身ならではの個性的な嗜好・志向を持つ「教養」を身に付けていかれることを期待しております。

4. 編集後記

「栗原後悔日誌@Harvard」第5号の本文は以上です。本校に縁の深いケネディ大統領が日本人記者団から「尊敬する日本人は？」と聞かれ、その回答「上杉鷹山」にほとんどの記者が即応できなかったという逸話は皆様ご存知だと思います。この真偽はともかく、私達は日本の文化をはじめとして、世界各地の文化を良く知る必要があります。現在、鷹山公の師、細井平洲の『嚶鳴館遺稿』(文化4(1808)年版を米澤図書館が昭和3(1928)年に復刻したもの)を本学図書館で借り出して、読んでおります。漢文であるだけに、その正確な理解は私にとって簡単ではありません。改めて私自身の勉強不足を痛感しています。

先日、ボストンを訪れたロンドン生活の長い或る方と共に、レストラン「ロック・オーバー」に行きました。その方は私のレストラン選定を褒めて下さり、「London みたいな雰囲気ですね」と仰いました。私は「ここは New England ですから」と微笑みつつそれにお応えしました。その夜、柔らかな光のなかで頂いたワインと食事、交わした言葉、そして応対する店員と周囲の客の品性、すべてに満足した一時でした。特に、シェイクスピアの『ヘンリー4世(Henry IV)』にも出てくる「マデイラ・ワイン」は忘れ難いものがありました。若人の皆様、これから世界中のレストランで、ビジネスや研究の素晴らしい仲間とも語り合うことでしょうか。その時に、どんな楽しい話題を提供出来るか。それこそ、皆様の情報交換能力の見せどころです。皆様のご努力とご活躍を心から願ってやみません。さて、中東情勢が激しく変化するなか、不安を抱きつつ私がインターネットで時折訪れるサイトがあります。それは、The Gazette の2月号の最後でも触れたパリのマドレーヌ広場に在る高級食材店「キャヴィア・カスピア」のサイトです。サイト上にあるキャヴィアの最高級品ベルーガの「ロイヤル・イラン」や「カスピエンヌ」はその名が表す如くカスピ海沿岸の中央アジア産です。しかしベルーガが採れるオオチョウザメの生息数が、環境変化と乱獲・密漁で急減し、通称ワシントン条約(CITES)によって、今年、天然物の全面禁漁と貿易禁止となりました。一人の地球市民としての立場だけでなく、私は美味しい料理を頂く人間の立場からも、中東に平和と繁栄が到来することを切に願っております。

以上

編集責任者	
栗原 潤	Jun KURIHARA
ハーバード大学	Senior Fellow,
ケネディ・スクール	John F. Kennedy School of Government,
シニア・フェロー	Harvard University
連絡先	
Mailing address:	79 JFK St., M-RCBG, Cambridge, MA 02138
Office address:	124 Mt. Auburn, Cambridge, MA 02138
Tel:	+1-617-384-7430; Fax: +1-617-495-4948
Email:	Jun_Kurihara@ksg.harvard.edu; JunKuri@aol.com